

第二章 先行研究—いわゆる指示機能を持つコソア—

2.1 はじめに

指示機能を持つコソアは一般に、指し示す物事が現場に存在する現場指示とそうでない非現場指示とに二分されるのが普通である。その名称は学者によって異なっているが、「現場指示」と「文脈指示」の分類が多く学者に受け入れられていることは、表1のまとめで明らかである。本稿でも以下、「現場指示」と「文脈指示」の呼称を使うことにする。

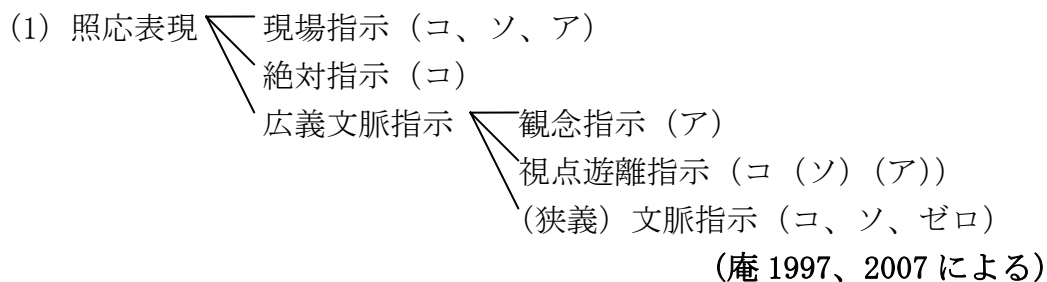
表1

現場指示	非現場指示	代表する学者
直接指示	文脈承前	三上 (1955)
眼前指示用法	文脈指示用法	久野 (1973)
独立的用法	照応的用法	黒田 (1979)
ダイクシス	照応	田中 (1981)
直示的用法	文脈指示的用法	神尾 (1990)、吉田 (2004)
現場指示	文脈指示	阪田 (1971)、堀口 (1978)、正保 (1981)、 吉本 (1992)、金水・田窪 (1992)、 馬場 (2006)

また、三つ(以上)の分類を行っているのは堀口(1978)、正保(1981)、庵(1997)などがある。

堀口(1978、1991)は「現場指示」、「文脈指示」、「知覚対象指示」¹、「観念対象指示」と「絶対指示」の五つに分類している。正保(1981)は主に堀口の分類を認め、「絶対指示」だけを除いて、四分類をした。

庵(1995a)は観念指示(ア系語)を狭義の文脈指示から独立させ、庵(1997、2007)でさらに細かい下位分類を行なっている。



¹ 堀口(1978)の定義によると、知覚対象指示とは他に実態を示すことなく、自分が知覚している事物を対象とする表現であり、普通「現場指示」として処理されている。それに対して、観念対象指示とは、自己の観念に存在する事物を他に明示することなく指示するものである。

佐久間以来、指示詞の研究が盛んになるに従って、研究の焦点も次々と移り変わっているが、現場指示での聞き手の縄張りをどう位置づけるか、文脈指示における聞き手の知識を配慮するかどうかなどの議論について、各場面におけるコソアの使い分けの問題への関心は変わっていない。

以下では、研究の流れを概観する。2.2では、現場指示についての「距離区分説」と「人称区分説」に関わる研究を紹介する。2.3では、談話文脈指示を代表する久野の一般化とそれに対する反対意見を紹介し、2.4では、文脈指示についてテキストの結束性の観点から、庵の理論を概観する。2.5では、現場と文脈指示以外の指示を紹介する。2.6では、先行研究から現場指示と文脈指示の統一的な説明を比較し、2.7では、本章のまとめと結論を述べる。

2.2 現場指示

2.2.1 人称区分説—佐久間（1936、1951）、神尾（1990）—

佐久間（1936、1951）は「指差す」あるいは「直接に対象を指示する」という機能を持つ「コソアド」を語頭に冠する語彙を体系的にまとめ、それらを人代名詞の人称（自称・対称・他称・不定称）と関連させて考える必要があると提唱した。

つまり、コは「わ（我）の縄張り」、ソは「な（汝）の縄張り」、アはどちらの縄張りでもない物事を指し示すとしている。それは下の図2のようになろう。

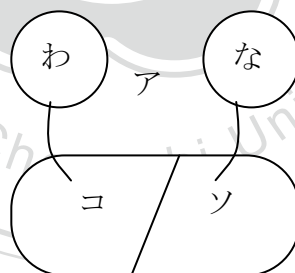


図1：コソアの縄張り

神尾（1990）は直示的用法（現場指示）の「こ」、「そ」、「あ」に関わる縄張りを「指示の縄張り」と、文脈指示用法の「こ」、「そ」、「あ」に関わる縄張りを「情報の縄張り」と区別して呼んでいる。

直示的用法には、「近」及び「遠」以外の存在を認め、その解釈において「聞き手」の存在に大きく関わるとして、佐久間と類似した考えを提している。

- (2) 「こ」 — <近> 話し手のなわ張り
- 「そ」 — <中> 聞き手のなは張り
- 「あ」 — <遠> 両なわ張り外の領域

2.2.2 距離区分説—服部（1968）、阪田（1971）—

佐久間の反論として、距離区分を支持するのは服部（1969）と阪田（1971）などである。

服部は「これ、それ、あれ」を、「近称、中称、遠称」という従来の区別方を支持する。その理由は話し手からも相手からもやや離れたものを指す場合と話し手が自分の後ろにあるものを指示する場合のどちらも「それ」が使われる故に、人称区分説に反対の意見を述べているのである。

阪田（1971）も、相手の領域ではないソ系語の使い方として、「われわれ」の勢力圏外ではあるけれども、さほど遠くはない場所を表すのにソが使われることを提示する。

(3) 横断歩道はそこにある。（阪田 1971）

(4) 「そこを左へ曲がって」ときみ子が運転手にいった。（阪田 1971）

2.2.3 折衷型—人称区分説と距離区分説の中間型—

2.2.3.1 三上章（1955）「楕円形」と「円形」

三上は佐久間説を認めながらも、コソアは三者対立ではなく、二つの二者対立であるという自らの見解を提出している。

①楕円形：話し手と聞き手の視点が対立する、コーソの対立である。

②円形：聞き手の視点が融合して、コアの対立をなしている。

楕円形は、人称区分説の観点で、円形は距離区分説の観点である。



図2：楕円形と円形の概念図

2.2.3.2 正保（1981）の「対立型」と「融合型」

正保（1981）は三上（1955）の楕円形を「対立型」、円形を「融合型」と名づける一方、三上説への修正も行っている。

まず、対立型の「コーソ対立」の場合、アは全く出現できないわけではなく、「弛緩のア」として現れる。

(5) A：「ねえ、あのセーター、いいと思わない？」

B：「どれよ。」

A：「その左から二番目の」

B：「ああ、あれね。若奥様向き、というところね。」

(源氏鶏太『鏡』、正保 1981 再録)

そして、「コア対立」の融合型においても、ソが「弛緩のソ」として、現れることができる。

(6) (タクシーに乗った乗客が運転手に)「そこのレンガ色の建物の前で止めてくれ」(正保 1981)

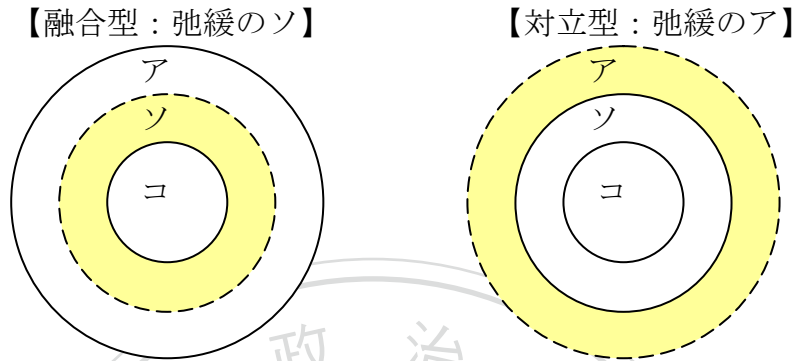


図 3 : 融合型と対立型 (正保 1981:75 による)

2.2.3.3 吉本啓 (1992) の「個人空間」と「会話空間」

吉本 (1992) は、現場指示を「指示物の同定が外界または出来事記憶に基づいて行われる場合である」としている。

「ソ」は聞き手の縄張りにある事物を指示する以外の使い方があるので、縄張り、勢力範囲などをより明確にした概念として、「個人空間」と「会話空間」の概念を導入している。

個人空間は各個人に属するものとして他者に認識されている領域のことである。個人空間に他者が進入すると不快がられ、また逃げられることもある。個人空間内の事物は「その個人によって、まず認識され、操作され得る」のが特徴的である。

会話空間は会話参加者を取り巻く領域であり、第三者は会話を立ち聞きしたり邪魔をしたりしないようにこれから距離を保たなければならない。現場指示のコソアと「個人空間」「会話空間」の関係は以下の通りである。

- ①会話空間以外の事物はアで指示される。
- ②話し手の個人空間の中 (同時に会話空間の中) の事物はコで指示される。
- ③会話空間の中で、話し手の個人空間の外の事物はソで指し示す。

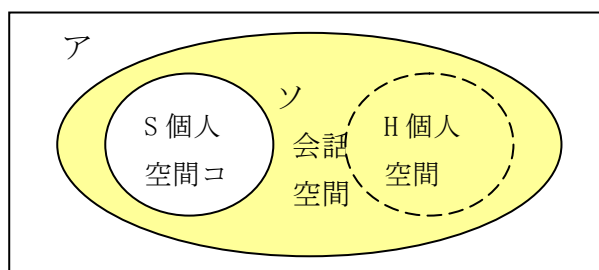


図4：個人空間と会話空間（吉本 1992 による）

2.2.3.4 金水・田窪（1992）の直接経験領域と間接経験領域

聞き手の知識を配慮しないことを主張した金水・田窪（1992）は話し手の心的領域を「直接経験領域」と「間接経験領域」に分け、コとアは直接経験領域、ソは間接経験領域と指定する。

直接経験のコは「話し手が現在働きかけているもの・処理中のもの・勢力を及ぼしつつあるもの」を指している。アは「話し手が現在働きかけられないもの・処理済みのもの・勢力を及ぼせないもの」である。

話し手が知覚している現場の事物であっても、概念構成的に定義したり、仮定的、可能的などのモータルを関係性において捉える必要のある場合には、間接経験的用法で指示することができる。また、聞き手の知識・知覚などは、「間接経験領域」に埋め込まれた二次的領域として規定される。

「直接経験領域」と「間接経験領域」の関係は以下の図5で表される。

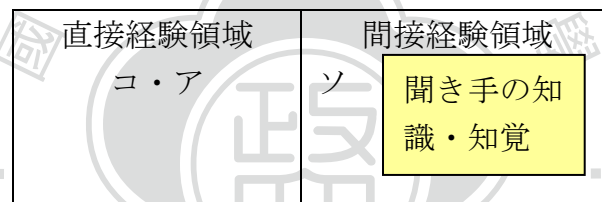


図5：直接領域と間接領域（金水・田窪 1992 による）

2.2.4 人称区分と距離区分で説明できない用法

2.2.4.1 金水・田窪（1990、1992）—曖昧領域のソ—

現場指示のソ系列には、融合型のソ（話者にとって中距離）、分離型のソ（聞き手の縄張り）以外、どこか分からない曖昧領域のソも存在する。

コとアが使えない場合、ソには穴埋めの機能があるので、「埋め草のソ」とも呼ばれる。また、曖昧領域のソは場所の使い方にとどまるようである。

(7) A：「おでかけですか。」

B：「ええ、ちょっとそこまで。」（金水・田窪 1990：138）

2.2.4.2 加藤（2004）—指示詞の逆転—

加藤（2004）は認知しやすいものはコ、そうでないものはアで指し示す例を提出している。また、同じ距離であっても、見た目の大きさにも認知に影響を与えるとして、距離区分説に対する反例を挙げている。

(8)（ある都市の郊外に小高い丘があって展望台がある。その展望台に立つと、遠くに山並みが見え、その手前に市街地が広がっている）

「この山は立山連峰で、あのビルがうちの会社です。」(加藤 2004 : 156)
 (9) 「[この/その/*あの] テレビ大きいね。画面の左下に小さなスイッチがあるけど、[*これ/*それ/あれ]は何？」(加藤 2004 : 158)

また、人称区分説の反例として、自分の体をソで、他人の体をコで指す例がある。それは誰かに按摩してもらう時や医者に背中 of 傷を見せてもらう時によく現れる使い方である。

(10) 医者：どこが痛いですか。ここですか。
 患者：はい、そこです。

2.2.5 現場指示のまとめ

コとアは融合型であれ、対立型であれ、指し示す物事にあまり差が見られないのに対して、ソ系語の場合は、位置づけに問題が出てくる。

表 2

	コ	ソ	ア
距離区分説 (融合型)	近い距離	①中程度の距離	遠い距離 (話し手と聞き手の領域以外)
人称区分説 (対立型)	(話し手の領域)	②聞き手の領域	
距離と人称以外		③曖昧な領域	

2.3 談話における文脈指示—ソとアの使い分け—

文脈指示とは指し示すもの (先行詞) が話し手と聞き手が存在する現場や観念の中に存在せずに、主に話や文章の前後文脈に現れるという指示である。

文脈指示の下位分類として、次の二つのタイプが見られる。

- (11) a. ア系統—ソ系統 (談話における文脈指示)
 b. コ系統—ソ系統 (文章における文脈指示)

特定の聞き手 (読み手) が存在するかどうかによって、前者は「談話における文脈指示」と呼ばれ、後者は「文章における談話指示」と呼ばれる。

「談話における文脈指示」を代表する理論は、久野 (1973) の一般化 (後に共有知識仮説と呼ばれる) をはじめ、吉本 (1992) の記憶階層モデルや金水・田窪 (1990、1992) の談話管理理論などがある。これらには、話し手と聞き手の知識が大きく関わっている。

「ソとアの対立」の反論として、テキストの結束性の観点からは、特定の聞き手を持たない文章における文脈指示 (コとソの対立) の研究も行われている (庵 1995a、1997、2007・堤 1998、2002 a・馬場 2006 など)。

また、記憶を表すア系語を狭義的文脈指示から排除する考え方もある (春木 1991、庵 1995a)。

他には、談話文脈であれ、文章文脈であれ、コソアの使い分けは区別せずに

共通するモデルで解釈できるという見方もある（堤 2002a）。

本稿では特定の聞き手が存在するかどうかによって分類する必要があると見て、以下に「談話における文脈指示」と「文章における文脈指示」を分けてまとめたいと思う。

表 3：文脈指示の下位分類

	聞き手の存在	文体	指示詞	目的
談話における文脈指示	聞き手（読み手）が存在する場合の指示	話し言葉	ソとア (コ)	知識管理
文章における文脈指示	特定の聞き手や読み手が存在しない場合の指示	書き言葉	コとソ	テキストの結束性

2.3.1 共有知識仮説—久野（1973）—

談話文脈領域では久野（1973）の一般化がほぼ定着している。

(12) ア系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合のみ用いられる。

ソ系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

(13) a. A：昨日、山田三郎っていう大学時代の友達に会ったんだ。

B：[その／*あの] 人、かっこいい人？（吉本 1992：114）

b. A：昨日、山田三郎さんという人に会ったんだ。[その／*あの] 人、大学時代の友達でね。（吉本 1992：114）

c. A：昨日、山田さんに会いました。[*その／あの] 人、いつも元気ですね。

B：本当にそうですね。（久野 1973：185）

談話文脈領域では、コがまったく使えないわけではない。久野（1973）が定義したコ系列は、目に見えないものを指すのに用いられるが、あたかもその事物が、目前にあるかのように、生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として、眼前指示的色彩が強いようであるとしている。また、この目に見えないものを指すコ系語は、話し手だけがその指示対象をよく知っている場合しか用いられない。

2.3.2 共有知識仮説への反論

2.3.2.1 阪田（1971）—個人感慨のA—

久野の一般化に先行して、阪田（1971）では話し手と聞き手両者が共通の知識である場合には、ア系語が用いられるだけでなく、指示されるものが外に表れておらず、話し手の意識にある場合の指示もア系語が用いられる、とする。

- (14) 唯圓：今日はよく晴れて比叡山があの様にはっきり見えます。
 親鸞：(坐わる) あの山には今も沢山な修行者があるのだがな。
 唯圓：あなたも昔あの山に永くいらしたのですね。
 親鸞：九つの時に初めて登山して、二十九の時に法然様に遇ふまでは大
 てい彼の山で修行したのです。
 唯圓：その頃のことが思われませうね。
 親鸞：あの頃のことは忘れられないね。若々しい精進と憧憬との間にま
 じめに一すちに煩悶したのだからな。
 (倉田百三『出家とその弟子』、阪田 1971)

親鸞が言った「あの頃」は明らかに「個人感慨」であり、「共通体験」とは
 言えない。逆に、実際に体験したことない唯圓にとっては、「その頃」と、ソ
 でしか指せない。

2.3.2.2 堀口 (1978) — 観念指示 (思い出) のア —

堀口 (1978) も「共通体験」以外、話者が対象に対する一方的な懐かしみを
 表わそうとする時でも「ア」で指すことができるとしている。

- (15) A：「秋に弟が日光へ行きます。」
 B：「ああ、あそこはいい所だよ。」
 A：「そこには何かありますか。」
 B：「あそこには東照宮があります。」(堀口 1978)

(15) はBが共通体験ではない、自分だけが知っている日光と東照宮を「ア」
 で指し示す例である。確かに、共通体験でも、話者の過去経験でも、話し手が
 「ア」で先行詞を指すことができるが、話し手が指示対象をよく知っている
 という共通点がある。逆にAの場合、自分が知らない場所を「ア」で指すことは
 できず、「ソ」しか使えない。これは、阪田とほぼ一致した結論と言えよう。

2.3.2.3 黒田 (1979) — 直接知識のア・間接知識のソ —

黒田 (1979) は聞き手の存在が消失した独り言の場合を取り上げて、ソ系は
 依然として存在することで、ア系語は共通体験ではなく、話し手の直接的な知
 識であると指摘している。それに対して、ソ系語は主に概念的な知識を指し示
 すと見ている。

- (16) 先週神田川で火事があったが、あの火事で学生が二人死んだのか。(黒
 田 1979)
 (17) 話し手：「先週神田川で火事がありました。その火事で学生が二人死に
 ました。」
 聞き手：「その火事のことは新聞で読みました。」(黒田 1979)

2.3.3 記憶階層モデル—吉本 (1992) —

吉本は階層的記憶モデルを用いて、指示詞の説明を試みている。記憶を「談話記憶」と「長期記憶」という二つの主要部分からなるとする。すべての経験を理解するための知識は長期記憶に納められる（世界知識、文法、辞書などの言語知識）。一方、談話記憶は理解された経験や言葉を一時蓄える場所である。個々の特徴的な事物や出来事が後まで記憶されることもあり、それは長期記憶と密接に関連するが、独立した「出来事記憶」に蓄えられるとしている。

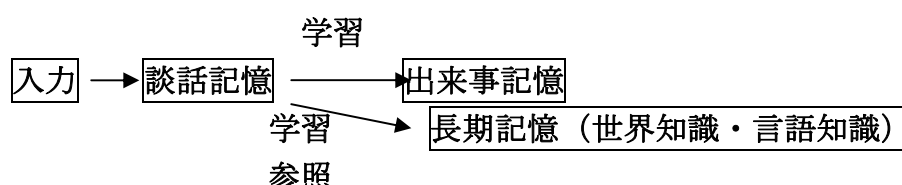


図 6：記憶階層モデル（吉本 1992 より）

話し手の記憶を提示しながら、依然として、吉本は文脈指示の「ア」は話し手・聞き手双方の出来事記憶中に存在する事物を指示するとしている。「コ」は談話記憶中の実質的な対象を指示し、文脈中で際立たせる働きをする。それに対して、「ソ」は単に記憶談話中の対象を中立的に指示し、ア・コで指示できないものを指示するとしている。

2.3.4 ア系語のレトリック用法—吉本（1992）—

吉本（1992）は話し手・聞き手共有知識のアのレトリックの表現として、聞き手に対する非難（例 18）や話し手の対象に対する思い入れなどの使い方（例 19）を取り上げている。

(18) A：この本、ミラーという人が書いたそうですが、どこの人ですか。

B：君、あの先生を知らないのか？

(19) A：Bさんが芸能界に入ったのはどんな時代でしたか。

B：あの頃は浅草オペラの全盛時代でしたね。

叱責、勧め、思い出語りなどの文脈では「聞き手の知識」は無視されるのは共有知識アの延長線にある使い方と考えられる。

2.3.5 談話管理理論—金水・田窪（1990）田窪・金水（2000）—

共有知識モデルの問題点として、かならず無限遡及に陥る欠点があるゆえ、田窪・金水（2000）は「話し手の想定する聞き手の知識」に言及すること自体を廃棄することを提案している。

また、聞き手知識に関する原則としては、「言語形式の使用法の記述は、その中に聞き手の知識を想定を含んではいけない。」としている。

田窪・金水（2000）は談話領域を言語情報と記憶データスペースの間にインターフェイスとして存在する心的処理領域と考えて、さらに二つの下位領域に

分けることにしている。

(20) 複数心的領域

a. 直接経験領域＝D-領域（長期記憶とリンクされる）

長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場情報とリンクされた要素が格納される。

b. 間接経験領域＝I-領域（一時的作業領域とリンクされる。）

まだ検証されていない情報（推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報）とリンクされる。記述などにより間接に指示される。

ア系列指示詞は、D-領域を検索範囲として、指示対象を検索せよという標識であるのに対し、ソ系列指示詞はI-領域を検索範囲として、指示対象を検索せよという標識であるとしている。

2.3.6 談話文脈領域のコを使い分け

談話文脈領域では、コがまったく使えないわけではない。久野（1973）の定義を再掲する。

(21) コ系列は、目に見えないものを指すのに用いられるが、あたかもその事物が、目前にあるかのように、生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として、眼前指示的色彩が強いようであるとしている。

吉本（1992）は文脈指示におけるコ使用は、「実質的、顕著的」でなければならないと指摘している。例（22）が反例として挙げられている。

(22) 田舎にいても専門医にデータを送って診てもらうことも可能というから、早く[*こう/そう] になってほしいものだ。

また、談話管理理論では、主にソとアの使い分けを論じているが、金水・田窪（1992）は近称のコが明らかに文脈指示では有標であり、何らかの強調的な効果をもたらすと述べている。

それに関しては、あるまとまった内容について説明・解説するための「解説のコ」²と、小説や体験談など話し手の視点を自由に話中の登場人物に近づけることができる「視点遊離のコ」がある。

(23) それから、このことは公にされてはいませんが、「あれは本当は事故死ではなくて自殺なのです。」（木村 1983、金水・田窪 1990：141 再録）

2.3.7 談話文脈指示のまとめ

ソとアの使い分けについて、話し手と聞き手の知識に大きく依存することが

² 金水・田窪（1992）は後方文脈指示を「解説のコ」の一種と見ている。

分かった。全体的な流れは、聞き手の知識を配慮する見方から聞き手の知識を排除する見方へ変わってきたと言えるだろう。

表 4：談話における文脈指示のまとめ

	ア	ソ	コ
聞き手を配慮する (対立型)	共通経験を指す	非共通経験を指す	①実質的 (現場) ②顕著的
聞き手を配慮しない (融合型)	①個人の経験、直接経験。 ②長期記憶とリンクする	①非個人経験、間接経験。 ②一時的作業領域とリンクする	③説明的 ④視点遊離的
語用論／レトリック (対立型の拡張)	非難、思い入れなどのレトリック		

2.4 文章における文脈指示—コとソの使い分け—

2.4.1 庵 (1994a、1994b、1995a、1997、2007)

庵 (1995a) はテキストの結束性の観点で、文脈指示には、金水・田窪 (1990、1992) が提出している「談話管理理論」的アプローチに適さないもう一つのタイプが存在することを指摘している。

(11) ソ系統—ア系統 (談話管理理論のアプローチ)

コ系統—ソ系統 (結束性のアプローチ)

談話管理では、「近称コは明らかに文脈指示においては有標であり、なんらかの強調的な効果をもたらす」(金水・田窪 1990 : 104)、文脈指示のコは「卓立性」(金水・田窪 1992 : 191) を持つと述べている。しかし次の例 (24) では、「順子」は文の中に卓立性を持っていると考えられるが、「コ」が使えない点で、あきらかに金水・田窪説の反例となっている。

(24) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。[*この/その]

順子は今他の男の子供を二人も産んでいる。(庵 1995a : 624)

庵は林 (1983) を参照して、指示機能を「指定指示」と「代行指示」に分けて、「この」と「その」の使い分けを分析し、以下のように定義している。

(25) 指定指示とは限定詞「この」「その」の全体が指示機能を担う場合の指示であり、代行指示とは「こ」「そ」の部分だけが指示機能を担う場合の指示である。

(26) a. 昨日ぜんざいを食べた。[この/その/φ] ぜんざいはうまかった。

b. 昨日ぜんざいを食べた。[この/その/φ] 味はなかなか良かった。

2.4.1.1 指定指示の場合コとソの使い分け

庵 (1997) における談話管理理論への代替案は、ソ系指示詞とコ系指示詞に対して、それぞれ異なった観点からの意味を与えるというものであった。

(27) a. 「この」はテキスト送信者が先行詞をテキストのトピック³との関連性という観点から捉えていることを示すマーカーである。

b. 「その」はテキスト送信者が先行詞を定情報名詞句へのテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである。

(庵 1997 : 61 より引用)

(28) 私はコーヒーが好きだ。[この/*その] 飲み物はいつも癒してくれた。

(29) エリザベス・テラーがまた結婚した。[この/*その] [女優/エリザベス・テラー]が結婚するのはこれで七回目だそうだ。(庵 1955 : 622)

(30) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。[*この/その] 順子は今他の男の子供を二人も産んでいる。(庵 1995a : 624)

(31) 田中さんは小学生の時まったく泳げなかった。[*この/その] 田中さんは今度水泳で国体に出場するそうだ。(庵・高梨・中西 2001 : 6)

庵 (1995a) によると、定情報名詞句のテキスト的意味の付与が極大ではなく、かつ定情報名詞句とテキストのトピックとの関与性も極大ではない時は、その定情報名詞句は「この」でも「その」でもマークできるとしている。両者が共に使える場合もある。「この」と「その」の関係は以下の図7の通りである。

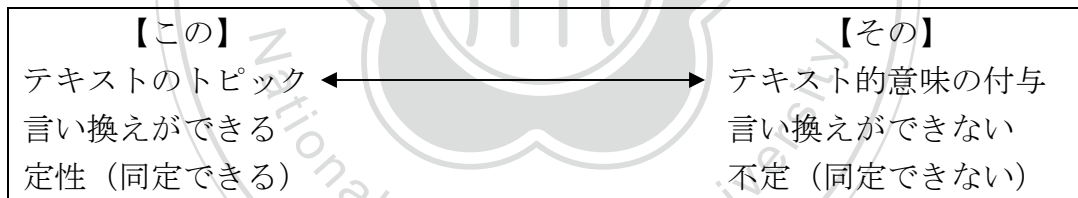


図7: 「この」と「その」の関係図 (庵 1997 に基づく)

2.4.1.2 代行指示の場合コとソの使い分け

「代行指示」における「こ」と「そ」の使い分けについて、庵は以下のように述べている。

(32) a. 単一文中での照応が可能なのは代行指示の場合に限られ、その場合は「その」、ゼロは文法的だが、「この」は非文法的になる。

b. 非単一文の代行指示の場合、先行詞が「文」「もの」であれば、「この」が使えるが、「人」である時は「この」は使いにくい。(庵 1995a : 629)

³ 庵 (1997) は「この」が使えるが「その」は使えない場合として、①言い換えがある。②遠距離照応の場合。③ラベル張り。④トピックとの関連性。の四つを挙げているが、その中で「トピックとの関連性」を共通する機能と見ている。また、庵 (1994a) も言い換えがある時、ソは使えないと指摘している。その理由は、言い換えがある時は照応名詞句は「テキストの意味が付与されない」というわけである。

- (33) 物の価値はその外見では分からない。
- (34) その力を十分に発揮した選手。(堀口 1978)
- (35) 僕が愛読している堅いことで有名な雑誌があるんだけど、今度 [この / その / ϕ] 表紙になんとヌード写真が使われたんだ。(庵 1995a : 629)
- (36) 明美は明るくて皆に愛されている。しかし [その / ? この / ϕ] 弟は乱暴者で近所の鼻つまみ者だ。(庵 1995a : 629)

「代行指示」の場合は基本的には「その」が用いられる。「この」は「非単一文」の場合にのみ使えるが使用が限られている。その理由は、代行指示における「その」は埋め草に過ぎない故であり、原則的に省略可能であるという。

2.4.1.3 「この」「その」の置き換え

「この」と「その」が置き換えられる場合、それぞれ表す意味が違っている。たとえば、例 (24 a) 「テキスト的意味の付与」が強制されている時、「その」が義務的に使われるのに対し、例 (24 b) のように、接続詞によって「意外性」が与えられた場合、「テキスト的意味の付与」義務的ではなくなるので、「この」と「その」が置き換えられるようになる。

- (24) a. 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。[*この / その] 順子は今他の男の子供を二人も産んでいる。(庵 1995a : 624)
- b. 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。ところが、[この / その / ϕ] 順子は今他の男の子供を二人も産んでいる。
- (37) 井伏鱒二氏が、十日午前十一時四十分、肺炎のため…死去した。(中略) 六五年、「姪の結婚」に始まる「黒い雨」の連載を開始。知人の日記や体験談、病床日誌などをもとに、原爆投下直後の惨状を淡々と描き、野間文芸賞を受賞した。[この / その / * ϕ] 作品は英訳されて英米で絶賛されたのははじめ、世界に紹介された。(朝日新聞朝刊 1993. 7. 11、庵 1994a 加筆)

例 (37) では「この」と「その」が担う照応詞は「指定指示」と「代行指示」の二通りの解釈ができる。「この作品」と「その作品」の指示対象が違っている。「その作品」は指定部が「井伏鱒二氏」によって制御された読み（井伏鱒二氏の作品）を持つ。一方「この作品」というと、「黒い雨という作品」の言い換えであり、全体で、「黒い雨」を指すことになる。

庵 (1996a) は指示と代用の対立のパターンをまとめると、以下の表になる。

表 5 : 指示と代用の区別

	対立の仕方	テキスト的意味の付与
指示	潜在的に三形式共可能	あり
代用	コ系統は非文法的	なし

2.4.2 堤 (1998、2002a、2002b、2002c)

堤 (2002a) は天野 (1993) の例を引用して、「代行指示」の「その」にもテキスト的意味の付与がある点で、庵 (1995、1996a) に反論を挙げている。

(38) a. ウェイターが笑っている。[??その妻/彼の妻] は、12月24日が誕生日だ。

b. ウェイターが大口を開けて笑っている。その妻はもっと豪快に笑っている。(天野 1993)

上の例で分かるように、先行文脈の「笑っている」と全く無関係な後続文脈が来るとき、指示詞の使用が不自然な場合もある。

2.4.2.1 堤 (2002) のモデル

堤 (2002) は金水・田窪 (1990)、田窪・金水 (1996、2000) が提出した二つの心的領域に対して賛意を表しているが、自らもモデルを提出している。

堤のモデルでは、まず、「場」⁴の中に二つの心的世界を設け、それぞれW_sとW_pと呼んでいる。「この」はW_sに登録された要素を指す。「その」はW_pに登録された要素を指す。

- ①W_sは話者が外界や文脈から構築した世界である。(W_o⁵≠W_s)
- ②W_pはW_sとW_oの間中的な存在 (interface) である。
- ③W_p内要素を介してW_s内要素を指示することを間接指示といい、W_p内要素を介さずにW_s内要素を指示することを直接指示という。
- ④W_p内の要素はすべて変項である。W_s内の要素は全て変項ではない。
- ⑤意味解釈は、W_s、W_p内の要素のいずれかを用いてなされる。
- ⑥W_s内から意味解釈に選出されるよう要素を指示的、W_p内から選出される要素を非指示的と呼ぶ。

表6：堤のモデル (堤 2002a による)

W _o →W _s	直接指示	指示的	コノ (アノ)
W _o →W _p →W _s	間接指示		コノ/ソノ
W _o →W _p			非指示的

2.4.2.2 名詞の意味素性 (同定可能性)

堤は名詞の意味素性が指示詞の使い分けに影響を与えることを指摘しており、固有名詞の場合、コ系語しか使えない例が多いと言う。つまり、W_pを介さずに、直接W_sに指示対象が登録されるものには、その典型として固有名詞があるとしている (例 39a)。

⁴高橋 (1956) は我々を取り巻く外的世界を「場面」、我々が心の中に作り上げる世界を「場」と呼ぶ。「言語体系に組み入れられるものは「場」であって、「場面」ではない」とした。

⁵堤 (2002) は、高橋 (1956) の「場面」に相当する外的世界をW_oと呼んでいる。

そして、コ系語と共起する固有名詞は、何らかの言語手段を使うことによって強制的にW_pを介する解釈を行わせる方略を使うと、「その」で指すことも可能になる（例 39b）。

(39) a. ダイアナ元王妃が亡くなりました。[この／*その]王妃は世界平和にとっても貢献したのを知ってる？

b. ダイアナ元王妃という人がなくなりました。[この／その]王妃は世界平和にとっても貢献したのを知ってる？

普通名詞の場合、ソとコともに使える例が多いが、その中でソしか使えない例文は以下の特徴を持っている。

①名詞の指示性が先行詞と同定不可能な場合。

②代行指示の場合。

③予測裏切りの意味を持つ場合。

堤（1998、2002a）は先行詞と同定可能な時は「この／その」のいずれも使えるが、同定不可能な時、ソしか使えないと指摘している。

(40) a. 一時間後に会社の者が受け取りに来ますから、[この／その]者に渡してください。

b. 一時間後に会社の者のうち誰かが受け取りに来ますので、[*この／その]者に渡してください。

例（40 a）、（40 b）で示したように、「この／その」が置き換えられても、ニュアンスが異なっている。

この者→話し手の念頭に存在する人を指す。

その者→誰か分からない人を指す。

また先行詞が複数の場合も同じである。

(41) a. 太郎は羊を飼っている。花子は[この／その]羊にえさをやる。

b. 太郎は羊を飼っていて、それを育てて売ることによって生計を立てている。

花子は[*コノ／ソノ]羊にえさをやる。（堤 2002 a）

例（41b）の場合、花子がえさをやる羊は、必ずしも先行詞と同じとは言えないことがはっきりしている。

この羊→直接指示的に「太郎が飼っている羊」を指示するのであるから、内実の変化があってはならない。

その羊→「太郎が飼っている羊」の内実は常に流動的で、集合を決定することができない。

2.4.3 馬場（2006）

馬場（2006）が扱う文脈指示は、小説や論文など語り手・筆者が一方向的にテキストを作り出し特定の聞き手を想定できない非対話型の談話、すなわち、文章における文脈指示である。対話形式の談話における文脈指示と内言・独り言

の観念指示は除外される。

具体的な使い分けを視点性、確定・充実性、コ系の言語直示性、ソ系の代用性の四つの観点で分けて考えている。その四つはお互いに相関関係である。

表 7：馬場（2006）のまとめ（馬場 2006 を参考、筆者作成）

		コ系	ソ系
視点性	空間的な距離感	近	遠
	時間的な距離感	現在	過去・未来
	心理的な距離感	肯定的（親近感）	否定的（嫌悪感）
確定・充実	欠ける	×	○
	満たす	○	○
言述直示性		○	×
代用性		×	○

空間の距離感の場合、「ここ」は文脈指示では用いにくく、使用されても現場指示となりやすい。

(42) 投獄された人でなければ、[ここ／そこ]がいかにかにひどい場所であるか実感としては分からないだろう。（寺津 1983、馬場 2006 一部修正）

原文では「そこ」が使われているが、馬場（2006）によると、「ここ」も非文とは言えないが、表現者が監獄にいる場合（現場指示）にのみ使われる。時間的距離感の場合、過去の出来事や行動を叙述する際に、特に夕形の連続する文連続では「それ」となりやすいのが証拠である。

(43) 昨日、文房具屋でプリントゴッコを買った。そして、すぐ[?これ／それ]を使って年賀状を作った。（馬場 2006）

また、確定性・充実性に欠ける対象を指す場合、コ系は使用できない。その一方、確定性・充実性を満たす場合はコ系・ソ系ともに使用できるとしている。これは、実現していない事柄を未来の時間として捉えることができるということで、やはり、時間的距離感と関連していると言えよう。

(44) A 国に滞在中、日本では想像できないようなことが次々と起こった。[*これら／それら]にはまったく動じなかった。（馬場 2006）

(45) 明日、お宅に伺いますので[*この／その]時に詳しくお話しします。

言述直示性とは先行テキストで述べた表現や内容をいわば引用のように捉え、それを一括りにして指示するという性質である。主にコが使われる。しかし、コ系の使用は絶対的なものではなく、心理的距離感や確定・充実性などの影響で、ソ系も使用されるが、指示対象が比較的長い先行テキストの場合はソ系は不自然であるとしている。

ソ系の代用性とは、ソ系の指示語が、先行テキストに存在する語句を代用する形で指示する性格である。

- (46) 人間の弱さの底に探りあてた強さ、そして自由と寛容、この本が私によ
びかけたのは [*これ/それ] でした。(『朝日家庭便利帳』、馬場 2006
再録)
- (47) 私の友人とその家族。
- (48) 昨日、地下鉄の駅で冠水事故があり、 [*この/その] 復旧に手間取り
多くの乗客が迷惑した。

2.4.4 推論による照応

先行詞と照応詞の関係について、代用の関係と類似した「推論による照応」がある。それは、先行詞とソ系との関係が形態的（指定関係）、または意味内容（代用関係）から直接理解されるものだけではなく、推論によるものも多く見られるという事実から明らかである。寺津(1983)、山梨(1992)、加藤(2004)、馬場(2006)はそのような指示はソ系語しか使えないとしている。

- (49) 投獄された人でなければ、そこがいかにひどいところであるか実感としては分からないだろう。(寺津 1983、馬場 2006 再録)

2.4.5 文章文脈指示のまとめ

談話文脈指示で見られる吉本と金水・田窪によるコを使い分けをも含めて、以下の表8のようにまとめることができる。論じる角度が違えば、出てくる結果も一様ではない。しかし、少なくとも「コ系語」と「ソ系語」の中心的な機能はほぼ一致していると言えるだろう。

表8：文章における文脈指示のまとめ

	コ	ソ
吉本 (1992)	①実質的 ②顕著的コ	
金水・田窪 (1992)	①解説のコ ②視点遊離のコ	
庵 (1995、1999、2007)	テキストのトピックとの関連	①テキスト的意味の付与 ②単一文脈の代行指示
堤 (1998、2002)	①指示表現＝直接指示する ②先行詞と同定できる (固有名詞が多い)	①量化表現＝前文の情報が付与され、その情報より X が限定する。 ②同定不可能な先行詞でも使用できる。 ③代行指示 ④予測裏切り性
馬場 (2006)	①視点性<近/現在/肯定的> ②確実・充実性 ③言述直示性	①視点性<遠/過去・未来/否定(嫌悪感)> ②不確実・非充実

		③代用性
寺津、山梨 加藤、馬場		推論による照応

2.5 それ以外の指示

2.5.1 知覚対象指示と観念対象詞

堀口 (1978) は思考語・内言など、一定の聞き手を目当てとするものではなく、聞き手の存在をなくして語られる指示を「知覚対象指示」と「観念対象指示」の二つに分けている。

知覚対象指示は、他に実態を示すことなく、自分が知覚している事物を対象とする表現である。現場指示との違いは、知覚している実態を身振りなどで他に示すという、言語表現以外の要素が付加される。普段、両者とも「現場指示」として処理されることが多い。しかし、内言、独白などにおける知覚対象指示の用法を内省すると、コ・アが圧倒的に用いられて、ソが用いられることは極めて稀である。

観念対象指示は、他にその実態を示すことなく自分の観念の中にある事物を指す用法である。それに対して、観念の中にある事物を指すという点は同じであるが、文脈に明示されているのが文脈指示である。

観念の中にある明確なものを指示対象とする場合にはアが圧倒的に多く用いられ、次にコが続く、ソは全く影の薄い存在であるようである。

対象が正体不明のものであったり、漠然として不確かなものであったりする場合には、もっぱらソが用いられる。

(50) (潰瘍のことが心に浮び)「一体それはどんな色をしているのだろうか。」

(黒田 1979)

また、独白や内言を中心とした観念指示は、会話や文章の場でも表される。これは、聞き手に一体感や仲間意識を持たせる機能もある。

(51) A : あれを持ってきてくれ。

B : はい、承知しました。(堀口 1978)

(52) (夜、恋人のことを思い出して次のようにつぶやく) [*この／*その／あの] 人は今どこにいるのだろうか。(吉田 2004 : 40)

表 9 : 知覚指示と観念指示の違い

	知覚しているもの	観念にあるもの
他に明示しない (現場や文脈に現れない)	知覚指示 (内言・独り事)	観念指示 (特に遠称アが多く使われる)

2.5.2 絶対指示—堀口（1978）、正保（1981）、吉本（1992）—

堀口は場所・時間に関するもので、常に特定の対象を絶対的に指示する用法があると指摘して、「これ」を絶対指示の用法と名づけている。

また、絶対指示は「対立型」の規則が使われている。

コ系統で指し示すのは、常に話し手がその中に存在する場所・時間を絶対的に表すものである。ソ系列は電話や手紙など話し手と聞き手が同じ場面に存在していない場合には、常に聞き手がその中に存在する場所を絶対的に表すものであるとしている。

a. 空間を表すもの

話し手を指す絶対空間：「ここ」「こちら」「この町」「この国」など

聞き手を指す絶対空間：「そこ」「そちら」「その町」「その国」など

b. 時間を表すもの

「これまで」「これから」「この頃」「この夏」

堀口によると時間を表す絶対指示はコ系列（近称）しか許されないようである。話し手の存在する時、つまり現在を指示するのである。

2.6 コソアの統一的な説明

堀口（1978）は日本語のコソアを、「近い・遠い」だけではなく「ホット・クール」の違いもあと見て、強烈指示の近称コ、遠称アと、平静指示の中称ソから成る、としている。

金水・田窪（1990）もそれに類似した考えを提示しており、心的領域を「直接経験領域」と「間接経験領域」に分け、前者をコ、ア、後者をソとして規定している。聞き手の知識・知覚など直接知ることが出来ないものも、話し手の「間接経験領域」に属するとしている。

現場指示と文脈指示のアは話し手が過去に直接経験として出会った対象を指示するので、空間の遠から時間の遠（過去）までの拡張と見られる。

ソ系統は間接経験対象で、文脈指示では相手が導入し、話し手が知らない対象、仮定的対象として話し手が導入した対象、世界の事物との対応が不明な不定的対象などがすべてである。

吉田（2004：56）はコ系語の基本的な性格は「直示性」で、談話領域では話者の思い入れによって、対象を直示するかのように指示するのである、と言う。また、ア系語の基本性格は話者と聞き手に対する「平等性」で、直示領域では平等に「ここにはない」対象として示され、談話領域では観念内に再生される「共通体験のア」に繋がる、とする。そして、ソ系語の基本的な性格は「媒介性」「関係性」であるとし、談話領域では媒介性が言語指示性として表れ、文章領

域では文の結束性を形成する、と言う。

加藤（2004）は指示詞の用法を「認知対象」（直示＝現場指示）、「短期記憶」（照応＝文脈指示）、「長期記憶」（想起＝知識指示）に分けている。直示用法のコ系は直接アクセス、ソ系は間接アクセス、ア系は遠隔アクセスと区別している。直示の場合はコソアとも使えるが、照応の場合はコとソしか使えない。また想起は長期記憶に関わるので、ア系しか使えないとしている。

表 10：指示詞の統一的説明について

	コ、ア対ソ		コ、ソ、ア	
	堀口（1978）	金水・田窪（1992）	吉田（2004）	加藤（2004）
コ	強烈指示・近	直接経験領域・近	直示性	直接アクセス
ソ	冷静指示	間接経験領域	媒介・関係性	間接アクセス
ア	強烈指示・遠	直接経験領域・遠	平等性	遠隔アクセス

2.7 おわりに

現場指示の場合、話し手（または聞き手）の縄張りと言物との関係によって、「コソア」は潜在的に三者交替できると言えよう。

「談話における文脈指示」は「ソ」と「ア」の使い分けが中心的であり（コは有標）、逆に特定の聞き手（読み手）が存在しない「文章における文脈指示」は「コ」と「ソ」の使い分けしか認められない。独り言と内言が中心的な「観念指示」や「知覚指示」は「ア」が多く使われるのに対し、絶対的な空間と時間を指す「絶対指示」の場合、話し手が存在する空間と時間は「コ」系語、聞き手が存在する空間は「ソ」系語で指しされる。

先行研究で言及されている、話し手、聞き手との関与、指示物の有無によって措定される「現場指示」、「文脈指示」、「観念指示」、「知覚指示」、「絶対指示」の関係は以下の表 11 にまとめることができる。

表 11

		現場で知覚できる	現場で知覚できない
+ 指示物	+ 話し手 (他に明示しない)	知覚指示 (現場指示と隣接する)	観念指示 (談話文脈指示と隣接する)
	+ 聞き手 (他に明示する)	絶対指示 (時間・空間を指す)	文脈指示 (特定・非特定な聞き手・読み手が存在する)
		現場指示 (特定・非特定な聞き手が存在する)	

以上検討してきたように、指示機能があるコソアについて、さまざまな観点から研究結果が発表されているが、次のような問題点もあると思われる。

一つは、コソアの使い分けについて、「現場指示」から「談話における文脈指示」までの連続性は多くの先行研究によって既に論じられているが、「文章における文脈指示」、いわゆるテキストの結束性の観点で見る書き言葉との連続性はまだ分からない、ということである。同じく「現場指示」からの拡張であるかどうかはまだ疑問の残るところである。

先行研究を踏まえて、筆者は現場指示と文脈指示の一貫性を一種の空間と時間の拡張関係（メタファー）と見ることができると思う。

(53) 現場と文脈のコ系語：Sを含む現場→現在

現場と文脈のソ系語：Sの領域外→未来や過去

現場と文脈のア系語：S（とHの共通）の遠方→（共通の）過去体験

具体的なことは第三章で検討する。現場指示と談話における文脈指示との間にはある程度つながりが見えるが、文章における文脈指示との関連性はどうか。そのつながりは意味拡張によるのか、意味の希薄化によるのかについて、コソアを語頭とする一連の語彙を指示機能の観点から、それらの連続性を見てみたいと思う。

もう一つは、これまで問題点として認められていなかった指示機能が曖昧なコソアはどう位置づけるか、という問題である。

以上の二つの問題点をめぐり、まず第三章でコソアの基本義を中心に論じる。そして拡張義との連続関係の観点から、第四章でコソアを含む接続詞を、第五章でコソアを含む感動詞を、分析していきたい。